

本書の構成

このドリルは、文章の〈要約〉力をつけるために編まれた、記述トレーニング用の問題集です。問題文はすべて一〇〇字以内で要約してください。

各問題の冒頭に、難易度の目安・制限時間を表示しました。

難易度レベル ★☆☆：基本

★★☆：標準

★★★：上級

問題用紙の裏の右側には草稿用紙を付けました。下書きその他、自由に使用してください。裏の左側には問題文の続きが印刷されています。続きを読むにあたっては、右側を必要なだけ折り曲げてください。用紙全体を裏返さずに要約文が書けます。

なお、1～23の上部の囲み数字(1・2…)は段落番号を、24～28の上部の数字は行数を表します。

別冊の〈解答・解説編〉には、問題文を再掲して文章構成等を図解しました。また〈論旨の構造／場面の展開／着眼点〉、〈要約へのアプローチ〉、〈解答例・配点〉を掲げ、読解における着眼点をチェックするとともに、自分でも答案を採点できるようにしてあります。担当の先生に採点していただくのがベストですが、やむを得ず自分で行う場合は、〈要約へのアプローチ〉の中に記した採点基準や、〈解答例・配点〉に掲げた部分点を十分参考にしてください。

さらに、著者のプロフィールや著書も紹介してありますので、ここを手がかりに学習の幅を広げてほしいと思います。

ここに収められた三十題に取り組むことで、文章読解力と記述表現力を養い、生き生きと学習していかれることを願ってやみません。

本書の使い方

原則、担当の先生の指示に従って使用してください。

なお、自習としてこの教材を使う場合は、以下の要領で取り組んでください。

① まず、〈問題編〉の冒頭に示した〈制限時間〉内で、全文の〈要約〉に挑戦してください。

——これは、文章の趣旨を〈速くとらえる〉ための練習です。

② 次に、同じ問題について、時間を気にせず、というよりもたっぷりと時間をかけて、〈この文章はこういうことを言っていたのか〉と、自分で納得できるまで読み込んでください。そして、自分の〈要約〉が十分なものであったかどうか、考え直してみましょう。不十分だと感じたら、推敲してみてください。

——これは、本文の主張を〈きちんと考えて、とらえる〉ための

目次

◆ 本書の構成

◆ 本書の使い方

◆ 要約についての考え方

〈論説〉編

1 思考の整理学

外山滋比古

2 知的複眼思考法

荻谷剛彦

3 「私」のための現代思想

高田明典

4 グーグルマップの社会学

松岡慧祐

5 日本人の死生観

立川昭二

6 森林からのニッポン再生

田中淳夫

7 世界のイメージ

國分功一郎

8 文化について

小林秀雄

9 現代の倫理と倫理的感受性について

山崎正和

10 「じぶん探し」について考える

小林秀樹

11 政治的思考

杉田敦

12 日本型年功制を生かせ

高橋伸夫

13 「みつともない」と日本人

榎本博明

14 物語の哲学

野家啓一

15 「しきり」の文化論

柏木博

16 メディア文化論

吉見俊哉

17 まなざしのデザイン

ハナムラチカヒロ

18 神の痕跡

岩田靖夫

19 じぶん・この不思議な存在

鷺田清一

20 〈心〉はからだの外にある

河野哲也

21 絵画の二十世紀

前田英樹

22 日本文化 モダン・ラプソディ

渡辺裕

23 戦争論

西谷修

〈小説〉編

24 胡桃割り

永井龍男

25 裸の王様

開高健

26 風立ちぬ

堀辰雄

27 曇り日の行進

林京子

28 黄金風景

太宰治

〈資料の読み取り〉編

29 やさしい日本語

57

30 言葉遣いに対する印象

59

練習です。①と②を繰り返すうちに、二つの力が結びつき、「速く、きちんと、文章内容がとらえられる」ようになります。

③ 最後に、「解答・解説編」を見て、「論旨の構造／場面の展開／着眼点」〈要約へのアプローチ〉を参考に、自分の読解のあり方を確認するとともに、答案を採点・添削（10点満点）してみよう。

——これは、「自分の答案を添削する力を養う」ための練習です。よりよい答案を書く力とは、試験時間内で自分の答案を添削し推敲できる力なので、この練習を繰り返すことが大切です。そのことで、読解力・記述力は確実に深化していきます。

▽ わからない言葉は、そのつど覚えていくようにしましょう。また、しばらく日をおいて、もう一度同じ手順でやり直してみるのが効果的です。前に読んだときと比べて、確実に読解力が深まっていることを実感できるはずです。

——各問題の本文は、さまざまなジャンルから成っています。繰り返し読むことで、テーマ・主題についての理解を深めることも、意義のある復習となるでしょう。

◆要約についての考え方

〈要約〉とは、「文章や話の重要な内容を選びとって、短くまとめること」を意味します。

そして、「要約」には、「大意の要約」〈要旨（主旨および趣旨）の要約〉、それと関連する〈題名の提示〉といった種類があります。図示すると下記のような関係になります。

論旨とは〈論述されている内容およびその筋みち〉を意味し、それは問題文の下段に〈論旨の構造〉として示してあります。要旨はその「論旨」のなかの〈要となる内容〉を指し、本書ではその把握の練習をします。したがって、まずは、

① 筆者が、「何について」話題、問題」〈どう述べているか〉意見、主張」という核になる部分を読み取ろうと、強く意識して読んでいかなければなりません。

と同時に、筆者は、思いついたことを思いついたままにただ書き連ねているわけではありませんから、

② 筆者が、①について述べるにあたって、「どのように話の筋つまり論理を展開させているのか」ということにも自覚的になる必要があります。

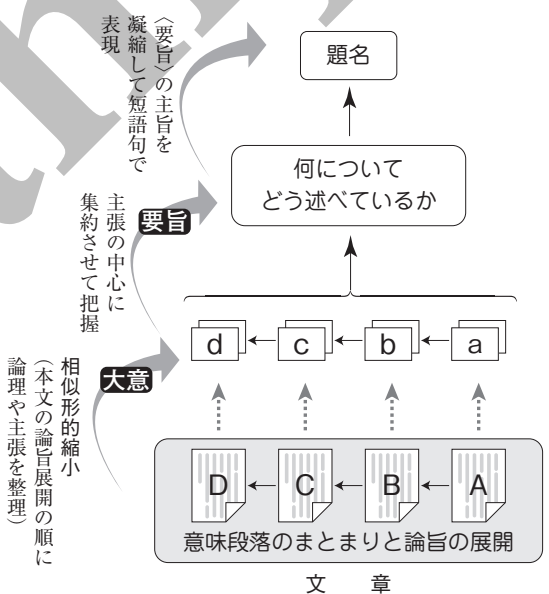
つまりは、①〈筆者のイタイコト〉と②〈論旨展開の構造〉という、この二点の把握が重要だということです。

入試現代文の問題文のほとんどは、長い文章の中のある特定の「まとまりのある一部分」を抜いて作られています。したがってそこには、「序論・本論・結論」〈起・承・転・結〉といった構成が見える場合もあり、それも〈要約〉の手がかりになるでしょう。

しかし、全ての文章がそうした定まった構成をとるとは限りませんので、右の①と②の把握が最重要となるわけです。

小説の場合は、場面のまとまりを意識しながら、その展開を押さえ、「ストーリー・あらすじ」をとらえるとともに、話の山場となる〈心情〉を把握し、「あらすじ」＋〈テーマ（主題）〉訴えていることの中心」という形で、どんな話なのかが明確になるよう、まとめていきましょう。

資料の読み取りの場合は、まずは①〈顕著な傾向として表れている事柄に注目〉し、②〈細部に表れている事柄にも着目〉していくという順序でデータを整理していきましょう。〈考え〉を要求されているときは、データから客観的に読み取れる範囲で普遍的な意見を添えていきましょう。



[illegible]

その言葉に胸を衝かれてもしたように、私は思わず目を伏せた。そのとき、突然、私の頭の中を一つの思想がよぎった。そしてさっきから私を苛ら^い苛ら^いさせていた、何か不確かなような気分が、ようやく私の裡^{うち}ではつきりとしたものになり出した。……「そうだ、おれはどうしてそいつに気がつかなかったのだろう？ あるとき自然なんぞをあんなに美しいと思つたのはおれじゃないのだ。それはおれ達^{たち}だったのだ。まあ言ってみれば、節子の魂がおれの眼を通して、そしてただおれの流儀で、夢みていただけなのだ。……それなのに節子が自分の最期^{さいご}の瞬間のことを夢みているとも知らないで、おれはおれで、勝手におれ達の長生きした時のことなんぞ考えていたなんて……」

40

いつしかそんな考えをとつおいし出していた私が、やっと目を上げるまで、彼女はさつきと同じように私をじっと見つめていた。私はその目を避けるような恰好をしながら、彼女の上にかがみかけて、その額にそっ

と接吻した。私は心から羞かしかった。……

とうとう真夏になった。それは平地でよりも、もつと猛烈な位であつた。裏の雑木林では、何かが燃え出しでもしたかのように、蟬せみ（注1）ひねもす啼き止まなかつた。樹脂のにおいさえ、開け放した窓から漂つて来た。夕方になると、戸外で少しでも楽な呼吸をするために、（注2）バルコンまでベッドを引き出させる患者達が多かつた。それらの患者達を見て、私達ははじめて、この頃俄（注3）かにサナトリウムの患者達の増え出したことを知つた。しかし、私達は相かわらず誰にも構わずに二人だけの生活を続けていた。

この頃、節子は暑さのためにすっかり食欲を失い、夜などにもよく寝られないことが多いらしかった。私は彼女の昼寝を守るために、前よりも一層、廊下の足音や、窓から飛びこんでくる蜂や蛇あぶなどに気を配り出した。そして暑さのために思わず大きくなる私自身の呼吸にも気をもんだりした。

50

そのように病人の枕元で、息をつめながら、彼女の眠っているのを見守っているのは、私にとつても一つの眠りに近いものだった。私は彼女が眠りながら呼吸を速くしたり弛くしたりする変化を苦しいほどはつきりと感じるのだった。私は彼女と心臓の鼓動をさえ共にした。ときどき軽い呼吸困難が彼女を襲うらしかった。そんな時、手をすこし痙攣させながら咽のところで持つて行つてそれを抑えるような手つきをする、――夢におそわれてでもいるのではないかと思つて、私が起こしてやつたものかどうかと躊躇っているうちに、そんな苦しい状態はやがて過ぎ、あとに弛緩状態がやつて来る。そうすると、私も思わずほつとしながら、いまの彼女の息づいてゐる静かな呼吸に自分までが一種の快感さえ覚える。――そうして彼女が目を醒ますと、私はそつと彼女の髪に接吻をしてやる。彼女はまだ倦るような目つきで、私を見るのだった。

55

「ああ、僕もここで少しうつらうつらしていたんだ」

そんな晩など、自分もいつまでも寝つかれずにいるようなことがあると、私はそれが癖にでもなったように、自分でも知らずに、手を咽に近づけながらそれを抑えるような手つきを真似たりしている。そしてそれに気がついたあとで、それからやっと私は本当の呼吸困難を感じたりする。が、それは私にはむしろ快いものでさえあった。

(注1) ひねもす——朝から夕まで。一日中。
(注2) バルコン——バルコニー。

(注3) サナトリウム——高原、海辺、林間などに設けられた転地療養所。おもに結核患者の療養所をいう。

「私」の婚約者「節子」は、肺の伝染性の慢性疾患で、死に至る病とされていた結核を患っている。「私」は「節子」に付き添って療養所で生活していた。

初夏の夕暮がほんの一瞬時生じさせている。一帯の景色は、すべてはいつも見馴れた道具立てながら、恐らく今を措いてはこれほどの溢れるような幸福の感じをもつて私達自身にすら眺め得られないだろうことを考えていた。そしてずっと後になって、いつかこの美しい夕暮が私の心に蘇って来るようなことがあったら、私はこれに私達の幸福そのものの完全な絵を見出すだろうと夢みていた。

5 「何をそんなに考えているの？」私の背後から節子がとうとう口を切った。

「私達がずっと後になってね、今の私達の生活を思い出すようなことがあったら、それがどんなに美しいだろうと思っていたんだ」

「本当にそうかも知れないわね」彼女はそう私に同意するのがさも嬉しいかのように応じた。

それからまた私達はしばらく無言のまま、再び同じ風景に見入っていた。**が**、そのうちに私は不意になんだか、こうやってうつとりとそれに見入っているのが自分であるような自分でないような、変に茫漠とした、取りとめのない、そしてそれがなんとなく苦しいような感じさえして来た。そのとき私は自分の背後で深い息のようなものを聞いたような気がした。**が**、それがまた自分のだったような気もされた。私はそれを確かめでもするように、彼女の方を振り向いた。

10 「そんなにいまの……」そういう私をじっと見返しながら、彼女はすこし唖れた声で言いかけた。**が**、それを言いかけたなり、すこし躊躇っていたようだったが、それから急にいままでとは異った打棄するような調子で、「そんなにいつまでも生きていられたらいいわね」と言い足した。

「また、そんなことを！」

私はいかにも焦れたいように小さく叫んだ。

「ご免なさい」彼女はそう短く答えながら私から顔をそむけた。

20 いましがたまでの何か自分にも訣の分らないような気分が私にはだんだん一種の苛ら立たしきに変わり出したように見えた。私はそれからもう一度山の方へ目をやったが、その時は既にもうその風景の上に一瞬間生じていた異様な美しさは消え失せていた。

その晩、私が隣の側室へ寝に行こうとした時、彼女は私を呼び止めた。

「さつきはご免なさいね」

25 「もういいんだよ」

「私ね、あのとき他のことを言おうとしていたんだけど……つい、あんなことを言ってしまったの」

「じゃ、あのとき何を言おうとしたんだい？」

30 「……あなたはいつか自然なんぞが本当に美しいと思えるのは死んで行こうとする者の眼にだけだとおっしゃったことがあるでしょう。……私、あのときね、それを思い出したの。なんだかあのときの美しさがそんな風に思われて」そう言いながら、彼女は私の顔を何か訴えたいように見つめた。

その言葉に胸を衝かれてもしたように、私は思わず目を伏せた。そのとき、突然、私の頭の中を一つの思想がよぎった。そしてさつきから私を苛らさせていた、何か不確かなような気分が、ようやく私の裡ではつきりとしたものになり出した。……「そうだ、おれはどうしてそいつに気がつかなかったのだろうか？ あるとき自然なんぞをあんなに美しいと思ったのはおれじゃないのだ。それはおれ達だったのだ。まあ言ってみれば、節子の魂がおれの眼を通して、そしてただおれの流儀で、夢みていただけなのだ。……**それなのに**、

35 節子が自分の最期の瞬間のことを夢みているとも知らないで、おれはおれで、勝手におれ達の長生きした時のことなんぞ考えていたなんて……」

いつしかそんな考えをとつおいつし出していた私が、やっと目を上げるまで、彼女はさつきと同じように私をじっと見つめていた。私はその目を避けるような恰好をしながら、彼女の上にかがみかけて、その額にそつと接吻した。私は心から羞かしかった。……

40 どうとう真夏になった。それは平地でも、もっと猛烈な位であった。裏の雑木林では、何かが燃え出してもしたかのようになり、蟬がひねもす啼き止まなかった。樹脂のおいさえ、開放した窓から漂って

(裏面に続く)

場面の展開

場面1 初夏の夕暮の出来事(二人の間の齟齬) (22行目)

初夏の夕暮

← これほどの溢れるような幸福の感じ
ずっと後になって、いつかこの美しい夕暮が私の心に蘇って来るようなことがあったら、私はこれに私達の幸福そのものの完全な絵を見出すだろう

「私達がずっと後になってね、今の私達の生活を思い出すようなことがあったら、それがどんなに美しいだろう……」

← 彼女は：私に同意するのがさも嬉しいかのように応じた

私は：変に茫漠とした、取りとめのない：
なんとなく苦しいような感じさえして来た
背後で深い息のようなもの：それがまた自分のだったような気もされた

← 「そんなにいまの……」

すこし躊躇っていたようだったが：打棄るような調子で、「そんなにいつまでも生きていられたらいいわね」と言い足した

← 「また、そんなことを！」

← 私はいかにも焦れたいように小さく叫んだ
風景の上に一瞬間生じていた異様な美しさは消え失せていた

場面2 その晩の出来事(前段での齟齬の種明かし) (23～40行目)

「あなたはいつか自然なんぞが本当に美しいと思えるのは死んで行こうとする者の眼にだけだとおっしゃったことがある……それを思い出したの……あのときの美しさがそんな風に思われて」

← 胸を衝かれてもしたように、私は思わず目を伏せた
私を苛らさせていた、何か不確かなような気分が：はつきりとしたものになり出した

← 「あのとき自然なんぞをあんなに美しいと思ったのはおれじゃない……おれ達だった……節子の魂がおれの眼を通して、そしてただおれの流儀で、夢みていただけなのだ。……**それなのに**、

節子が自分の最期の瞬間のことを夢みているとも知らないで、おれはおれで、勝手におれ達の長生きした時のことなんぞ考えていた……」

← 私は心から羞かしかった

来た。夕方になると、戸外で少しでも楽な呼吸をするために、バルコンまでベッドを引き出させる患者達が多かった。それらの患者達を見て、私達ははじめて、この頃俄かにサナトリウムの患者達の増え出したことを知った。しかし、**私達は相かわらず誰にも構わずに二人だけの生活を続けていた。**

この頃、節子は暑さのためにすっかり食欲を失い、夜などもよく寝られないことが多いらしかった。私は、彼女の昼寝を守るために、前よりも一層、廊下の足音や、窓から飛びこんでくる蜂や蛇などに気を配り出した。そして暑さのために思わず大きくなる私自身の呼吸にも気をまんだりした。

そのように病人の枕元で、息をつめながら、彼女の眠っているのを見守っているのは、私にとっても一つの眠りに近いものだった。私は彼女が眠りながら呼吸を速くしたり弛くしたりする変化を苦しいほどはつきりと感じるのだった。私は彼女と心臓の鼓動をさえ共にした。ときどき軽い呼吸困難が彼女を襲うらしかった。そんな時、手をすこし握りながら咽のところで持つて行ってそれを抑えるような手つきをする、

夢におそわれてでもいるのではないかと思つて、私が起こしてやったものかどうかと躊躇っているうちに、そんな苦しい状態はやがて過ぎ、あとに弛緩状態がやって来る。そうすると、私も思わずほっとしながら、いまの彼女の息づいてる静かな呼吸に自分までが一種の快感さえ覚える。――そして彼女が目を開きますと、私はそつと彼女の髪に接吻をしてやる。彼女はまだ倦るような目つきで、私を見るのだった。

「あなた、そこにいたの？」
「ああ、僕もここで少しうつらうつらしていたんだ」

そんな晩など、自分もいつまでも寝つかれずにいるようなことがあると、私はそれが癖にでもなったように、自分でも知らずに、手を咽に近づけながらそれを抑えるような手つきを真似たりしている。そしてそれに気がついたあとで、それからやつと私は本当の呼吸困難を感じたりする。が、それは私にはむしろ快いものでさえあった。

場面3 真夏の頃の二人（その後の私の様子）（41行目）

真夏になった

← 節子は暑さのために：食欲を失い、夜などもよく寝られないことが多いらしかった

← 彼女の眠っているのを見守っている呼吸を速くしたり弛くしたりする変化を苦しいほどはつきりと感じる

← 私は彼女と心臓の鼓動をさえ共にした

← 軽い呼吸困難が彼女を襲う：手をすこし握りさせながら咽のところで持つて行ってそれを抑えるような手つきをする：苦しい状態はやがて過ぎ、あとに弛緩状態がやって来る

← いまの彼女の息づいてる静かな呼吸に自分までが一種の快感さえ覚える

← 自分も：寝つかれずにいる：と

← 知らずに、手を咽に近づけながらそれを抑えるような手つきを真似たりしているそれに気がついたあとで：本当の呼吸困難を感じたりするそれは……快いものでさえあった

要約へのアプローチ

私が、当時死に至る病だとされていた結核を患う婚約者の節子に付き添って、療養所で共に生活したときのことをつづった文章である。〈テーマ「訴えられていることの中心」を押さえる形で、〈あらすじ・ストーリー〉を整理していこう。

場面1 では、美しい夕暮れを節子と共有し、「私」が「今を措いてはこれほどの溢れるような幸福の感じをもつて……眺め得られないだろう」「ずっと後になって、いつかこの美しい夕暮が私の心に蘇って来るようなことがあったら、私はこれに私達の幸福そのものの完全な絵を見出すだろう」と思いつつも、「不意に……変に茫漠とした、取りとめのない……なんとなく苦しいような感じさえて来た」様子が描かれる。「背後で深い息のようなもの」が聞こえ「それがまた自分のだったような気もされた」ともあり、「私」の思いは節子とシンクロしてはいるのだが、その「苦しいような感じ」「深い息」の内実は明確には意識されていない。それは、「そんなにいつまでも生きていられたらいいわね」と感じている節子の思いだった。「私」は死のことを言う節子をたしなめるが、その晩に、「あなたはいつか自然なんぞが本当に美しいと思えるのは死んで行こうとする者の眼にだけだとおっしゃったことがある」と言われて、「節子が自分の最期の瞬間のことを夢みているとも知らないで、おれは

おれで、勝手におれ達の長生きした時のことなんぞ考えていた」とに気づく。そして、「心から羞かし」くなる（場面2）。場面3では、夏の暑さのために「食欲を失い、夜などもよく寝られないことが多い」らしい節子と「心臓の鼓動をさえ共にし」「軽い呼吸困難」に襲われたときの節子の仕草を真似たりしている「私」の様子が描かれている。ストーリー的には、節子と世界を共有しているはずだった「私」が齟齬のあったことに気づき、よりいっそう節子に寄り添おうと思うようになったという話だと整理できるであろう。要約するにあたっては、背景的な事情も加味してまとめた。

① 結核を患う婚約者節子と療養所で生活した私 ……3点

② 美しい夕暮れを前に幸福な思い出を夢みた ……2点

③ だが、節子が死を思ったことに気づかず心から羞じた ……2点

④ 節子と心臓の鼓動をさえ共にし ……2点

⑤ 呼吸困難状態になるのを真似たりした ……1点

という方向で、「私」がより節子に寄り添おうとしていく様子を明示する形で整理していけばよいであろう。（＊は必須要素）

この場合、中心的な事柄は④にあるので、その要素が全く出ていないものは全体が0点となる。

解答例・配点

① 1点分	① 1点分	① 1点分
② 1点分	② 1点分	③ 1点分
③ 1点分	④ 2点分	
④ 2点分		
⑤ 1点分		

堀辰雄（ほりたつお）

一九〇四年―一九五三年。小説家。

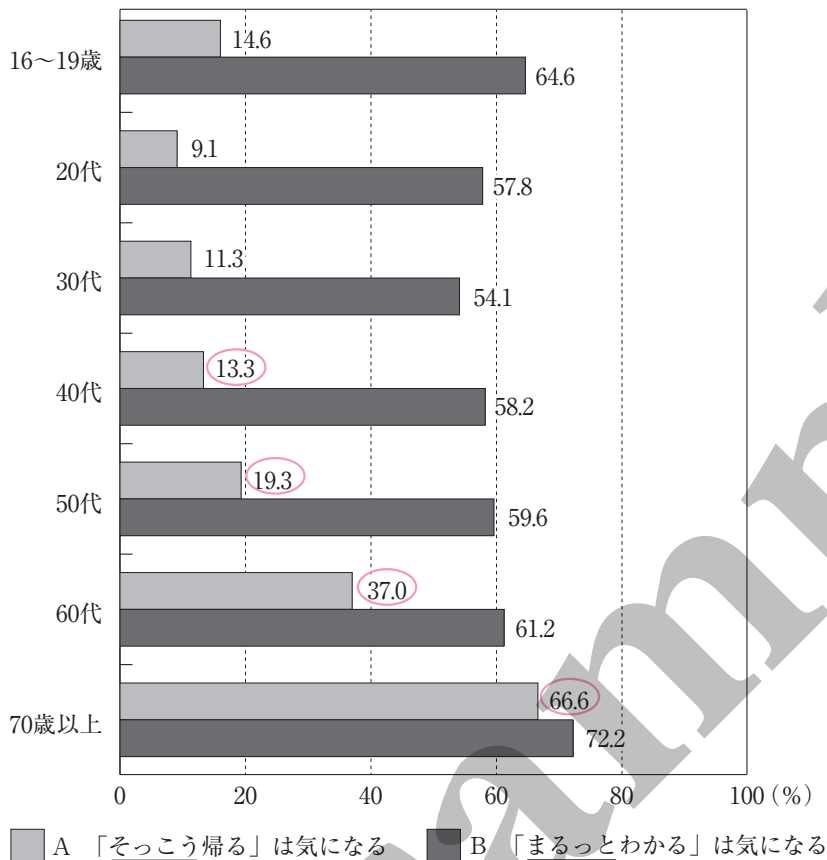
主な作品 「聖家族」「美しい村」「麦藁帽子」「菜穂子」「娼捨」「曠野」など。

出典 「風立ちぬ」の一節。

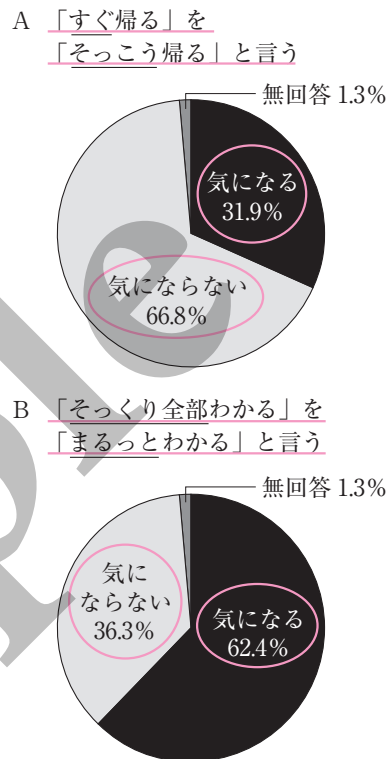
次の【資料】は、文化庁が行った「国語に関する世論調査」の結果をまとめたものである。国語の授業で、この【資料】から読み取ったことをもとに「コミュニケーションを図るときに気をつけること」について一人一人自分の考えを文章にまとめることとなった。【資料】から読み取った内容を明示し、それをもとにあなたの考えを全部で一〇〇字以内でまとめなさい。なお、解答にA、Bを使用し、構わない。

【資料】 下線部の言い方をほかの人が使うのが気になりますか、それとも気になりませんか。

② 年代別の「気になる」を選択した人の割合



① 全体



(文化庁「令和2年度「国語に関する世論調査」の結果の概要」から作成)

着眼点

- まずは前書きに注意しよう。前書きにはときに解答を考える上で手がかりとなる内容が書かれているので、きちんと読むことが大切である。ここで取り上げられている【資料】は、「国語に関する世論調査」の結果をまとめたものである。そのことを踏まえた上でグラフを読み取っていきこう。
- さらに、29の着眼点で挙げた
- (1) 図表が何に関するものであるのかを表題などを見て確認する
 - (2) そこに表れている顕著な傾向に着目する
 - (3) 必要に応じて細部から読み取れる事柄にも着目していく
- という3点も踏まえて考えていこう。

前書きおよび(1)の観点から、
 ・【資料】①は、「下線部の言い方をほかの人が使うのが気になりますか」という世論調査の結果であり、項目はA「「すぐ帰る」を「そっこう帰る」と言う」とB「「そっくり全部わかる」を「まるっとわかる」と言う」の二つであること、
 ・【資料】②は、【資料】①の二項目に関して、「年代別の「気になる」を選択した人の割合」の世論調査の結果であること、
 を押さえよう。

設問文に「【資料】から読み取った内容を明示し」とあるので、(2)と(3)の観点から、
 ・【資料】①から、Aに関しては、「気になる」「人より「気にならない」人の方がかなり多いこと、逆にBに関しては、「気にならない」人より「気になる」人がかなり多いこと、
 ・【資料】②から、Bに関しては、どの年代の人も使用が気になること、Aに関しては、若い年代の人はあまり気にならないが、50代から60代、70代以上と年齢が高くなるほど使用が気になること、つまりは年代によって使用への違和感の程度が異なること、
 を読み取る。

これらの内容を踏まえた上で、「コミュニケーションを図るときに気をつけること」について一人一人自分の考えを文章にまとめる」ことを設問は求めている。

【資料】②から読み取れる内容を踏まえれば、

・Aは年代によって使用への違和感が異なるので、あまり違和感を覚えな
い年代と「コミュニケーションを図
る」ときには使つて構わないが、そ
うではない年代のときには使用する
のを避け、別の表現にした方が良
い

・Bはどの年代の人も違和感を覚える
ので、「コミュニケーションを図る」
ときには使用を避け、別の表現にし
た方がよい

ということが分かる。この内容を一般
化して捉え、「コミュニケーションを
図るときに気をつけること」をまとめ
れば、

・どの年代でも抵抗感を覚える表現の
使用は避ける

・表現に対する意識は年代によって異
なっており、そのことに留意して、
相手が違和感を覚えることのないよ
う、適切に言葉を選ぶ必要がある
といった方向の解答になるだろう。

着眼点でも示したように

- ・【資料】①にある世論調査の結果から、Aに関しては、「気になる」人より「気にならない」人の方がかなり多いこと、逆にBに関しては、「気にならない」人より「気になる」人がかなり多いこと、
- ・【資料】②にある世論調査の結果から、Bに関しては、どの年代の人も使用が気になること、Aに関しては、若い年代の人はあまり気にならないが、50代から60代、70代以上と年齢が高くなるほど使用が気になること、つまりは年代によって使用への違和感の程度が異なること、

が読み取れる。……a

- これらのうち、【資料】②から読み取れる内容に着目すれば、
- ・Aは、違和感を覚えな年代と「コミュニケーションを図る」ときには使つて構わないが、そうではない年代のときには使用するのを避け、別の表現にした方がよい
- ・Bはどの年代の人も違和感を覚えるので、「コミュニケーションを図る」ときには使用を避け、別の表現にした方がよい

*②2点分

*①3点分

Bの使用にはどの年代も抵抗感を覚えるが、Aは年代に	*③2点分
より使用への違和感が異なる表現だと言える。どの年代	*④1点分
も受け入れ難い表現は避けつつ、年代で異なる表現への	
意識に留意して、適切な言葉を選ぶことが大切である。	

- という考えを導き出すことができる。この内容を一般化して捉え、「コミュニケーションを図るときに気をつけること」をまとめれば、どの年代も受け入れ難い表現は避けつつ、年代によって表現への意識が異なることに留意して、相手が違和感を覚えることのないよう適切に言葉を選ぶ必要がある……b
- といった方向のものが解答になる。
- 以上、a、bの内容を100字以内でまとめていくことになる。
- *① Aは年代によって使用への違和感が異なる表現である ……3点
 - *② Bの使用にはどの年代も抵抗感を覚える ……2点
 - *③ どの年代も受け入れ難い表現は避ける ……2点
 - *④ 年代で異なる表現への意識に留意して、適切な言葉を選ぶ ……3点
- 【資料】から読み取った内容を明示することが設問の要求であるので、その内容である①と②の方向性を欠くものは全体が0点となる。（*は必須要素）